

事件の噂は瞬く間に学園内外を問わず広がった。

学園長の失踪。そして数名の先生が精神病院へ入院。広まった事実はこれだけで、その真相が伝えられることはなかった。むろん噂に尾びれが付きミステリアスに語られてはいったが。

しかしそれでも、新聞沙汰になることはなかった。一部のオカルト雑誌に記事が載ったものの、それを真剣に受け止めるものは雑誌の愛読者くらいでしかない。

「理事長には毎度恐れ入るよ……よくマスコミに流れなかったな」

大上がこぼした一言に、天道寺が苦笑しながら答える。

「手腕家だからな……としか言いようがないけどね」

全ては有栖学園の理事長……カウンターハンターと妖精学者の支援者が手配してのことだった。学園長失踪から数日、大上は後処理を全て天道寺と理事長に任せたままだったが、そのほとんどを片付けていた。

武闘派グノーシス主義を信仰していた人々は、その信仰度合いによって適切な処理……カウンセリングなどを受け、平常へと戻りつつある。大上の正体を見てしまった五人の信徒にも処置は施され、彼らが見た狼男は夢だったのだと思いきませているのだとか。ある種の洗脳に近いが、木宮のような悪質な物ではないのだから、そこは大目に見るべきだろう。

そして月原は……今、ブリージッド女子修道院で洗礼を受けている。彼女はこれまでの行いを恥じ、そして先祖が信じた女神を信仰することで本当の自分を取り戻すのだと、月原に付き添い心神のケアを行う四方が言っていた。同時に身につけてしまった発火能力をコントロールする修行も修道院で兼ねるらしい。

発火能力は木宮が求めた炎の邪神の力ではない。女神ブリージッドが彼女に与えた聖なる炎なのだと、誰もが信じている。

「それにしてもさ……未だに良く判らねえんだが」大上はソファーもたれかかっていた身を起こし、天道寺に尋ねる。「なんで月原さんの夢に、狼男が出てきたんだ？」

今回の事件は、狼男を敵だと信じ込んだ原因は、彼女が木宮によって見せられた夢に登場したから。狼男を敵だと信じ込んだ原因は、彼女が木宮によって見せられた夢に登場したから。しかし夢は真相の半分しか見せることはなく、狼男にいたっては完全に無関係。にも関わらず月原の夢に狼男が現れた理由が、大上には理解できなかった。

「これは……夢を見せた張本人が死んだ今となっては確認のしようもないが……」

天道寺は前置きをした上で、彼なりの推理を語り出す。
「まず月原さんに夢を見せたのは、もしかしたら洗脳するためではなく、発火能力を目覚めさせるためだったんじゃないかと思うんだ」

その根拠として、天道寺は木宮が月原に嗅がせたお香をあげた。天道寺がその成分を調べたところ、幻覚作用のある成分が多分に含まれていたらしい。天道寺が言うには、これは洗脳催眠よりむしろ逆行催眠……過去を思い出す催眠術に用いるものらしい。むろんこんな用途は正しい催眠のやり方ではなく、オカルトを信じていた木宮だからこそ用いた手なのだから。

「ところが力を目覚めさせることはなく、代わりに狼男がいたと口にした。そこで木宮はそれを逆手に取り、月原さんを洗脳する口実に使った。その為に、自分の教団を武闘

派に仕立て上げたんだろう」

側近という立場だった五人の信徒から聞き出した話によると、木宮が教団を武闘派へと移り換えていったのは月原の入団かららしい。木宮にとってまず一番大事だったのは月原を自分達の女神に仕立て上げること。だからこそ、月原に合わせ教義を変えることに何の抵抗もなかったのだろうと、天道寺は言う。

「いや、それは判るんだが……なんで ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ が出てきたんだ？ そこが判らん」

天道寺の推理はおそらく正しいだろうと大上も思っている。しかしこの推理は、月原の夢に ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ が出てきた事への説明にはならない。大上にしてみれば、自分のことではないにしても、同族が悪役に仕立て上げられたのはいささか不本意なのだ。

ふんがい 憤慨する大上を見て、天道寺は嫌らしく笑う。そして不意に、天道寺は大上へと手を伸ばした。

「……なんだよ、急に」

伸ばされたその手を握り……握手をする大上。天道寺の動作は突然だったが、大上は反射的に伸ばされた手を取ってしまった。

「月原さんはこう言ったよな。 おおかみおし 狼男 おおかみおし が手を伸ばしてきた、って」

手を放しながら言う天道寺の言葉に、大上はまだ頭が追いついていかない。

「つまり、だ。夢の おおかみおし 狼男 おおかみおし は、なにも月原さんを襲おうとして手を伸ばしたんじゃない。手を差し伸べようとしたのさ」

同じ動作でも見る側の状況で印象は全く異なる。もし大上が天道寺に敵意を持っていたら、先ほど天道寺が伸ばしてきた手に悪意があると感じただろう。

「予知夢さ。月原さんは、お前に助けられるってブリージット様から告げられていたんだよ。他の場面にしたって、ブリージット様が見せていたに違いない。火事のシーン、両親が殺されるシーン、どれも彼女にとつて重要な場面だ。それによく考えてみる、そもそも木宮は催眠に関しては素人だ。あの アロマテラヒ お香 アロマテラヒ だって粗悪な出来だったぜ。あいつの催眠がうまくいっていたと考える方が不自然だ」

どうだろうか？ 普通に考えれば予知夢などという方が不自然だが、しかし月原は女神の加護を受けていた女性。少なくともオカルトそのものとも言える ウエア・ウルフ 狼男 ウエア・ウルフ にしてみれば、予知夢の存在を疑うことの方が不自然。

「いやでもさ……それは出来過ぎだろ？」

天道寺の話が本当だとすると……全ては女神の導きということになる。

そもそも今回の事件、本来はカウンセラーハンターの大上が関わる事件ではない。結果論だが、木宮達は悪徳ハンターではなかったのだから、これはむしろまっとうなハンターなどが関わるべき事件だったはず。にも関わらず大上が月原と出会ったのは……やはり女神の導きなのだろうか？

「ま、それを決めるのは俺じゃなく……」天道寺の言葉を遮るように、リビングのドアがカチャリと小さな音を立て開いた。「お前達が決めることだ」

ドアを開けたそこには、洗礼を受けたばかりの月原が真っ赤な尼僧服を着て立っていた。

「その、なんだ……良かったね」

何を話せばいいのか。月原とリビングで二人きりにさせられた大上は、ソファから立ち上がりやや緊張気味に声を掛ける。

月原は黙って頷く。特に言葉はなく、沈黙があたりを支配する。この雰囲気、どこか懐かしいな……月原と教会で会っていた頃はそう昔のことではないのだが、それを懐かしいと大上は振り返る。

「ありがとうございます」

最初に沈黙を破ったのは月原だった。深く頭を下げ、月原は礼を述べる。

そして顔を上げまたしばしの沈黙。すると月原は、そっと大上に近づいた。

「ちよっ、え？」

そして月原は、腕を回し大上の胸に顔を埋めた。

「また……胸を貸してください。私、どんな顔をして良いのかよく判らなくて……」

いつでも胸を貸すと言ったのは大上だった。月原はあの時の言葉に自ら甘えだす。あの時と違うのは、大上が狼の姿でいること。あれほど憎々しかった狼の毛並みが、今はとても心地良い。

「何も知らなかったんですね、私……両親のことも、あなたのこと……」

ただ闇雲に敵かたきを探していた月原。そして見つけたウエア・ウルフ狼男は、彼女に手を差し伸べ常闇から月明かりの美しい世界へと引き上げてくれた。

あの夢のように。

「みんな、あなたのおかげです……大上さん。ありがとうございます……」

素直な感謝に、大上は思わず照れた。その照れ顔を月原が見られないのは、大上にとって救いだった。

「いやでも、それもブリージッド様のお導きだよ……」

照れ隠しに、大上は出来過ぎだと批判した天道寺の言葉を引用する。それを聞いて月原は、顔を埋めながらふるふると顔を振った。

「シスターの方々にも言われましたが……正直、私はまだ自分の信仰というものに自信が持てません」

元から彼女は、キリストもグノーシスも傾倒出来なかった。信仰心の無さに悩みすらしていた。そんな彼女もブリージットの洗礼は受けたが、まだ信じ切れてはいなかった。

「今信じられるのは……大上さん、あなただけです」

一瞬鼓動が高鳴った。大上はこの音を月原に聞かれただろうか、また鼓動を早めてしまふ。それを確かめようとしてか、月原は回した腕に力を入れている。

「あ、いや、そう言ってくれるのは嬉しいけど……」

どう切り返せばいいのだろうか。ハードボイルドに語るなら……いや、もうそこどころではない。男としてどう対処すべきか、大上には全く何も浮かばない。

「……迷惑ですか？」

ああ、そんな尋ね方をされたら……もう大上に、感情を偽る余裕など無かった。

そうか……俺やつぱり惚れてるわ。今更、大上は自覚した。

「そんな事ありませんよ。むしろ、その……ね」

もっと気の利いた言葉はないのか。歯がゆい想いを自分に向ける大上。言葉にならない分を、大上は月原の頭を撫でることで表す。

月原はというと……まるで子猫のように、撫でられることに心地よさを感じていた。いつだったか、大上に抱きしめてもらうことに懐かしさと暖かさを感じたことがあった。あれは父親への追憶にも似た感覚……月原は大上の中に、父親の姿を重ねていた。

それだけだろうか？ 月原は自問する。大人の異性に対するあこがれはあるだろうし、そこへ父親の姿を見出そうとするのは、ずっと敵かたきを捜し続けた月原にしてみれば当然の行為だったかもしれない。

彼女は愛に飢えていたから。

愛……その言葉に、月原は頬を赤く染める。大上に求めていたのは父親の代わり……だけではない。求めていたのは家族愛ではなく……月原も今更、自分の感情を明確に意識した。いつからだろう……やっと自覚できた感情を振り返ろうとしたが、止めた。今の彼女にとって過去よりも今の感情を大切にしかかったから。

「側にいてください……ずっと……」

なんと大胆な告白だろうか。自分で口にしながら、月原は恥ずかしさにのたうち回りたくなるのを、より腕に力を入れることで逃れる。

さて、大上はなんと答えるか。

「……いつもね、俺はハードボイルドってのを意識してたんだが……ダメだね、こういう時になんて言えばいいのか、まったく言葉が浮かんでこない」

だから……大上は一度月原を自分から放し、一度まっすぐに彼女を見つめる。

赤い糸という女神の導きは、関係ない。ウェア・ウルフ狼男は人間より獣に近いんだから、自分の感情に素直になるのが得策だ。

大上はそつと耳元に大きな口を近づけ、至ってシンプルな言葉を囁いた。

そして月原は大上を見つめ……微笑んだ。